

## マルクス主義理論史研究の課題（V）

——相田慎一氏の近著によせて——

太 田 仁 樹

### 1

マルクス主義理論の歴史に目を向ければ、カール・カウツキーの重要性を否定することのできる者はいない。ロシア革命以前のマルクス主義運動において中心的な位置を占めていたドイツのマルクス主義運動のなかで、エンゲルスなきあと、カウツキーは理論活動の中樞に位置していたのであり、後に激しくカウツキー批判をおこなうことになるレーニンをはじめとするボリシェヴィキたちも、第一次大戦勃発までは、カウツキーの理論をマルクス主義の到達点と見なしていたのである。マルクス主義理論史上において「カウツキーの時代」が確かに存在したのである。カウツキーの著作は日本や中国においてもレーニンよりも先に読まれており、マルクス主義の世界化という点でも大きな役割を果たしている。

ところが戦後の日本では、カウツキーは、名前は知られているが読まれることの少ないマルクス主義者の筆頭といってもよいであろう。これは日本のマルクス主義文献の読者層のほとんどが、レーニンによる「背教者カウツキー」という規定の影響を直接、間接に受けていて、カウツキーを、歴史的に破産を宣告された、読む必要のない理論家と見なしていることによるように思われる。戦前には30点以上を数えたカウツキーの翻訳<sup>(1)</sup>も、一般の読者

が現在入手しうるものは、歴史研究など数点に過ぎない。カウツキーについての研究書も、10年以上も前の山本佐門氏の政治史的色彩の強い著書<sup>(2)</sup>のみであった。

相田氏の著書『カウツキー研究——民族と分権——』（昭和堂、1993年）は、マルクス主義理論史上もっとも重要な人物の一人であるカウツキーの理論について、わが国で初めて本格的な分析のメスをいれた著作といえよう。研究対象の重要さだけでも、この著作の刊行は意義のあることである。だが本書の意義はそれにとどまらない。本書の重要性は、わが国と西欧の先行業績に対する根底的な批判と、相田氏自身の大胆なシェーマの提出にある。まず私に興味深い論点に絞ってその内容を概観してみよう。

## 2

第1章「第2帝制期ドイツ社会民主党の社会的構成」と第2章「ドイツ社会民主党と『生産の社会化』論」は、小ブルジョア的な改良主義的労働者政党であった SPD が「社会主義革命の理論としてのマルクス主義理論を受容したのはどうしてなのか」という「マルクス主義の受容問題」を、当時の SPD の実態分析から検討しようとしている。この場合の実態分析とは、①党員の社会的構成の問題と②集権主義派と分権主義派との党内対立の問題の析出である。

党員の社会的構成の問題を扱っているのが第1章である。ここではミヘルスの「ドイツ社会民主党 1. 党員と社会的構成」および W.H. シュレーダーの『社会民主党帝国議会議員と帝国議会議員候補者1898—1918』を素材にして、第2帝制期の SPD の社会的構成が詳細に吟味されている。当時の SPD の成員の多くは、ミヘルスのような「資本主義的経営の工業労働者層」でも、マルクスの『資本論』に措定されている「工場労働者」でもなく、手工業的性格の強い「職人労働者」にはかならなかった。マルクス主義

理論における「労働者」と実際の SPD の「労働者」の現実とのこの乖離は、カウツキーの「プロレタリア」概念に反映されている。すなわち、カウツキーは SPD の主力が「職人労働者」であることを認識しつつ、その「職人労働者」は『資本論』的な「工場労働者」と融合しつつある、という拡大された「プロレタリア」概念をもっていたのである。

次に「職人労働者」はなぜマルクス主義を受容したのかという問題については、靴製造業を典型とする第 1 類型、織工を典型とする第 2 類型、左官や大工を典型とする第 3 類型に区分して考えられている。この三つの類型がマルクス主義を受容する理由はそれぞれ違っているが、とくに第 3 類型（「自由労働組合総務委員会」によって代表される）にとっては、マルクス主義のなかの「集権的組織化」思想が大きな意味をもっていた。

第 2 章は、1900年のマインツ党大会における国内通商政策をめぐる論争を素材として、集権主義派と分権主義派との党内対立の意味を明らかにしようとしている。ここで見られる党内対立は、一方の集権主義派に、自由労働組合総務委員会派（レギーン、カルヴァ）、党中央＝ベルリン派（ペーベル、モルケンブール、アウアー）、ドイツ・マルクス主義派の多数（カウツキー、ルクセンブルク）が属し、他方の分権主義派に、南ドイツ派（フォルマル、ダーヴィット）、ドイツ・マルクス主義派の一部（シェーンラング）が属するもので、その対立状況は修正主義論争などとは配置を異にする。この対立は小ドイツ主義と大ドイツ主義の対立を歴史的起源とする「民主的ドイツ」実現の道筋をめぐる集権主義と分権主義の対立の SPD 内部における発現である。

同種の対立状況は、1890—92年の組織問題論争、1894—95年のバイエルン邦国予算案承認問題論争、同時期の農業綱領論争、第 1 次大戦にいたる民族問題論争においても見られる。そして注目すべきことに、マルクス主義の「生産の社会化」論は、集権主義派による分権主義派の「圧殺」のためのイデオロギーとして機能したのである。

以上のような理解に立って相田氏は、次の 3 点の指摘をおこなっている。

第1に、マルクス主義の「生産の社会化」論が「集権化のイデオロギー」として機能したのは、当時のドイツ国民経済が有機的に組織化されていなかったことに原因がある。第2に、多様に分岐した諸潮流が同一の党に「共存」したのは、当面する課題を「反プロイセン（反ユンカー）＝民主化」と考え、「労働者と市民層の提携」戦術を取る点で一致していたからである。第3に、マルクスの「生産の社会化」論は、党内対立では「集権化のイデオロギー」として機能したが、ドイツ・マルクス主義派内部では「帝国主義論」形成の基本的論理として用いられた。しかし、マルクス主義的帝国主義論の枠組みで当時のドイツを認識する限り、変革課題は「反資本主義（反独占資本主義）＝社会主義革命」以外にありえなくなる。その意味で、この帝国主義論はドイツ・マルクス主義にとって「躓きの石」とみなすことができる。

このような相田氏の見方は、マティアス以来の「マルクス主義の受容問題」に対する批判と独自の見解を含むものであると同時に、コルシュ以来のマルクスの唯物史観とカウツキーの唯物史観を対立させる理解を批判するものである。さらに相田氏の立場は、日本における帝国主義論史研究の従来の枠組みに対する批判を内包するものでもある。その批判のポイントは次のようなものである。従来のわが国の通商政策論争に関する研究では、マルクス主義的帝国主義論を前提しているために、「封建社会」と「市民社会」の相剋を内包する第2帝制期のドイツの問題が抜け落ちている（114頁）。そして、星野中<sup>(3)</sup>、保住敏彦<sup>(4)</sup>、松岡利道<sup>(5)</sup>、田中良明<sup>(6)</sup>などの帝国主義論についての学説史的研究は、「マルクス主義の潮流、それも『左翼共産主義』の潮流からマルクス主義の帝国主義論史を考察しているために、近現代の世界史の幾多の歴史的事実と乖離するような結論を導出している」（119頁）。

第3章～第7章では、＜集権主義 vs 分権主義＞および＜反絶対主義（反ユンカー）・民主化路線 vs 反資本主義（反帝国主義）・社会主義革命路線＞という二つの対立軸を念頭において、カウツキーの政策思想の諸側面がそれ

ぞれ考察される。

第3章「第2帝制期 SPD と帝国主義認識の形成」と第4章「カウツキーと帝国主義認識」は、カウツキーの帝国主義認識を三つの時期にわけ、第1期（～1900年）を「帝国主義＝前近代の遺制」説、第2期（～1910年）を「資本主義の必然的政策」説、第3期（1911年～）を「超帝国主義」論の時期と特徴づけた上で、第1期と第2期を分析している。

1973年発表のものと論文<sup>(7)</sup>で、相田氏は反資本主義（反帝国主義）・社会主義革命路線の形成の観点から、第2期のカウツキーの帝国主義認識はルクセンブルク、ヒルファディング、レーニンの先駆であるが、レーニンの帝国主義論にくらべて経済分析の裏付けにおいて弱点をもつと位置づけている。本書でもこのような主張が残されているが（221頁）、1911年以降「マルクス主義中央派」への移行とともに、カウツキーが第1期と第2期を統合させようと努力したことが新たに指摘され、第2期のみを高く評価しようとする研究動向に異論を唱えている。著者は、第2期の「帝国主義＝資本主義の必然的政策」説は、ドイツ第2帝制に対する「反絶対主義＝民主化」の立場を基調とする SPD の路線に対立することになり、左派の党内での孤立化をもたらしたと指摘する。

第5章「カウツキーのドイツ第2帝制観」は、1907年の論考「帝国の状態」および「外国とドイツの党の戦術」を素材として、カウツキーのドイツ資本主義認識を検討したものである。前章でみた帝国主義認識の第2期（「資本主義の必然的政策」説）のカウツキーでも、政策論においてはドイツ資本主義の「特殊の型」論が堅持されている。第1期の論理は「克服された」のではないということであろう。1911—12年の軍縮論争においては、帝国主義＝「政策転換可能」論が展開され、それは1914年の諸論文において完成されたといわれる。この第3期の議論こそ、第1期の「前近代の遺制」説と第2期の「資本主義の必然的政策」説の「統合」である。このような相田氏の評価は、第3期のカウツキーに対して激しい非難を浴びせるレーニン

と、それに追隨してきた研究者たちの議論を批判するものになっている。

、第6章「ドイツ第2帝制とカール・カウツキーの経済政策思想」は、1901年の著作『通商政策と社会民主党』を素材として、カウツキーの経済政策思想と歴史学派経済学者オルデンベルクの「農＝工立国」論との親和性を剔抉し、ルクセンブルクやパルプスさらにバウアーやヒルファディングと比較して「歴史学派的マルクス主義」ともいえるカウツキーの特徴を指摘している。

ドイツ・マルクス主義派はその「生産の社会化」論をもって集権主義派に理論的武器を提供した、というのが相田氏の重要論点だが、第7章「カウツキーの民族理論」は、分権主義という観点からカウツキーの民族理論を考察し、ドイツ・マルクス主義の中心人物と目されるカウツキーが分権主義思想の持ち主でもあることが主張される。わが国では田中克彦氏と丸山敬一氏によるカウツキーの民族理論に関する研究があるが、オットー・バウアーとの対立面を一面的に強調してきた従来の研究に対して、相田氏はむしろ、ルクセンブルクやクノーラの「集権主義的マルクス主義」の潮流との差異を強調する。

集権主義派の論理は「生産の社会化」論に立脚する政治的集権主義であり、小民族国家樹立の現実的不可能を根拠とする民族自決権の否定である。これに対してカウツキーは、「生産の社会化」論は経済理論であり政治的集権主義と必ずしも結びつかないこと、小民族国家の独立は「平和的な貿易政策の方法」によって可能であること、を主張している。バウアーやレンナーとは1899年のオーストリア社会民主党の「ブリュン民族綱領」の立場を共有するものであり、彼らとカウツキーの差異は大きくない。差異は、「民族自治」をバウアーらが「文化的自治」に限定するのに対し、カウツキーがそれを「民族国家」機能にまで拡大しようとするところにある。このようなカウツキーの政治的「分権主義」思想は、政治的「集権主義」思想を自己のレーズン・デートルとしてきたマルクス主義の理論的パラダイムの転換を企図す

る画期的な試みであった、と相田氏は高く評価している。本書の副題が「民族と分権」とされている所以であろう。

### 3

相田氏は、本書の狙いを「表層のカウツキー」像に対して「深層のカウツキー」像を彼自身の論文に即して明らかにすることだといっている。「表層のカウツキー」像とは、相田氏が克服しようとする内外の先行業績のことを意味する。氏はその内容として「教条主義者」と「統合主義者」という二つのカウツキー像を挙げている。具体的に本書の叙述を見てみると、一つはわが国における星野中氏以来の帝国主義論史研究の流れであり、もう一つは欧米におけるマティアス以来の「統合理論としてのカウツキー主義」を巡る議論であると理解できる。前者の流れはかつて氏自身が属していたものでもある。

本書のもとになる諸論文は、最も初期のものは1973年に発表されて、最新のものは1993年に発表されている。その間20年の歳月が流れている。第3章と第4章が1970年代に書かれたもので、それらはもともと『資本論』体系の発展としての帝国主義論という理論史的関心から書かれていたが、その他の1985年以降に書かれた諸論文は、ドイツ第2帝制の社会と国家に対する政策思想の歴史的意味という問題意識から書かれている。この問題意識の変化の中に、相田氏のカウツキー研究の視座の変化が浮き彫りにされている。本文中に名前の出ている星野、保住、松岡、田中の各氏の立場は、かつての相田氏の立場でありそれは克服されなければならないというのである<sup>(8)</sup>。

さらに、このような相田氏のカウツキー論の視座の変化は、『資本論』の世界の延長線上に構想された「資本主義的帝国主義」の問題から第2帝制の社会と国家の「特殊後進性」の問題の解明へのカウツキー自身の問題意識の変化過程に照応するものでもあるという（iii頁）。

相田氏が克服すべき立場とは、『資本論』の発展として「資本主義の最高段階としての帝国主義段階」の理論を設定する立場である。この立場に立てば、ヒルファディングとレーニンとが最も高く評価されることになり、カウツキーの帝国主義認識の三つの段階についても、第1段階から第2段階への歩みにのみスポットライトが当てられて、第2段階から第3段階への歩みの意義が見落とされるというのである。「教条主義」としてのカウツキー像とは、第2段階のみを高く評価してきたこのような立場のことをいうのであろう。

従来のわが国の帝国主義論史研究において、第2帝制期ドイツの「特殊後進性」問題が見落とされてきた、という相田氏の指摘は正当であろう。しかしこの問題は、わが国の比較経済史研究が最も重視してきたものであった。相田氏が本書で依拠しているのが、大野英二氏や住谷一彦氏の研究であるのも不思議ではない<sup>(9)</sup>。そしてこのような問題意識は、わが国の思想史研究などにおいて「マルクスとヴェーバー問題」としてつとに強調されてきたものでもある。相田氏の新しい視座とは、いってみればマルクス的問題構制にヴェーバー的構制を重ねるという作業をカウツキー研究においておこなうということだとも理解される。このような視座の設定はヒルファディング・レーニン型の帝国主義論を規準とする理論史研究が見落としてきたものを再発見させるという意味で有効なものであろう。

では「統合主義者」としてのカウツキー像にたいする批判は、わが国の帝国主義論史研究に対する上述の批判とどのような関連をもつのだろうか。マティアスの「統合主義者」像は理論構造の解明というよりも、当時のSPD内部でのカウツキーの言説の機能についての命題であった。それに対する相田氏の批判と独自の主張も、カウツキーの言説の機能に関するものになっている。相田氏の見方によれば、当時のSPD内部の対立の最も重要な分岐は集権主義派と分権主義派のあいだにあり、カウツキーを筆頭とするドイツ・マルクス主義派の「生産の社会化」論は、集権主義派全体にとって分権主義派



を「圧殺」するための理論的武器として役立ったというのである。

この集権主義派の武器という機能論と、ドイツ第2帝制の「特殊後進性」認識という理論的内容との関連が問題になる。相田氏によれば、ドイツの「特殊後進性」認識がなければ、集権主義派と分権主義派との対立の意味が理解できないという関係になる。なぜならこの対立は、ドイツ近代化の特殊性に淵源する、ドイツ社会全体を貫く亀裂の SPD 内部での発現であるからである。その重要性は、わが国における帝国主義論史研究の流れが見落としてきたものであり、同時にマティアス論文が射程にいれることができなかったものである。

かくして相田氏にとってわが国の比較経済史研究の意義は絶対的である。氏はこの研究に依拠して第2帝制期のドイツ社会のイメージを描き、それをベースとしてカウツキーの諸言説を検討し直し、自ら旧説を脱却するとともに、わが国の帝国主義論史研究とマティアスらを同時に批判する視座を獲得したのである。これによって本書は、カウツキーに対して新しい光を投げかけるというだけでなく、初めてカウツキーの理論の全体像を描く土台を築くことが出来たのである。しかし、比較経済史研究に対する全面的な依存は、また固有の難点を有するものでもあるように思われる。次に、本書が研究史に寄与したものと、残された課題について述べてみたい。

#### 4

本書の優れている点は、わが国の第2インター期ドイツ・マルクス主義研究のなかに色濃く流れていた左派偏重の傾向に対して自覚的に対峙していることである。1960年代後半から本格的に開始されたわが国のこの分野の研究は、ロシア・マルクス主義に収斂することない多様なマルクス主義の流れを発掘するかにみえたが、その評価規準はロシア・マルクス主義の影響を克服したものとは言えなかった。ドイツ・マルクス主義を右派と左派に分け、右

派に対する批判の鋭さをよしとするこのような態度は、理論史研究における活学活用主義<sup>(10)</sup>の現れであり、対象となる各理論家の全体像とその特質の解明を妨げるものであった。本書はこのような傾向から全く断絶している。それはまた、カウツキーの言説のなかに自分にとって共感するものを見だし、それによって左派偏重の傾向に対抗しようとするものでもない。相田氏の立場はそのような活学活用主義的研究態度そのものを超克している。

氏の立場は、第2帝制期のドイツの問題がどのようにカウツキーの理論のなかに反映されているのかの解明を課題とするものである。カウツキーの言説の検討を通して第2帝制期のドイツの問題を考えるととってもよい。このような立場に立つことによって歴史学派の諸議論との対比も可能になるのであろう。そのような検討が可能であるというところに、他の（とくに急進主義的な）マルクス主義者の議論に比べての、検討対象としてのカウツキーの理論の価値があるということであろう。

そのことの裏面として明らかにされているのが、急進左派のドイツの現実からの遊離の指摘であろう。1910年のマッセン・ストライキ論争の時期に、ドイツ・マルクス主義派はカウツキーらの「中央派」とルクセンブルクらの「急進左派」に分裂するが、相田氏はこの分裂の意味を帝国主義認識の変化との関連で次のように説明する。帝国主義＝「資本主義の必然的政策」説（＝「資本主義の最高の発展段階」説）は戦略論的には「反資本主義＝社会主義革命」説を意味する。そのことは「反絶対主義＝民主化」の立場をとる SPD 全体の政治路線と対立し、党内での孤立を免れ得ない。この窮地を脱するためには、＜SPD と分裂し、マルクス主義的に純化された少数者のゼクテ＝党を新たに形成するのか、それともこの帝国主義＝「資本主義の必然的政策」説を SPD 全体の政治路線に合致するように修正し、再度 SPD との一体化をはかるのか＞という選択に直面した。前者を選択したのが「急進左派」で、後者を選択したのが「中央派」であった、と（224頁）。この相田氏の見解によれば、急進左派の独立は帝国主義＝「資本主義の必然的政策」説

のゆえであり、しかもその認識は第2帝制期ドイツの「特殊後進性」を把握しえないものであった。彼らの急進的立場はドイツの現実に対する認識不足に照応しているということになる。急進左派の孤立を、中央派の「裏切り」によるものと見なす通説に反対し、ドイツ社会の現実（＝「特殊後進性」）認識の欠如に結び付けるこの見解は説得力をもつものである。

しかし相田氏の場合、急進左派の孤立が「SPD 党内での孤立」と政治状況的に捉えられていて、彼らの社会認識の内容の分析において明らかにされているとは言い難い。戦略論と社会認識を一括してとらえることにより逆に社会認識の限界の解明が不十分となっているように思われる。帝国主義政策をどう見るのかという社会認識のレベルの議論で「資本主義の必然的政策」説の立場に立ったとしても、そのことがすなわち当面の戦略的課題を必ず資本主義打倒とするということにはならないであろう。「エルフルト綱領」では、理論的部分では「貧困、圧迫、隷属、屈辱、搾取」が資本主義の必然的結果であると説明されているが、当面の要求はドイツの民主化と社会政策の強化である。ネガティブな現象が資本主義にとって必然的なものであったとしても、その克服の要求がすなわち「反資本主義＝社会主義」とならない場合もあるのである。また、ヒルファディングは帝国主義＝「資本主義の必然的政策」説のうち最も完成度の高い理論を構築したが、彼はそれ以後もその認識を維持しつつ、カウツキーとともに「中央派」として活動している<sup>(11)</sup>。この例は「必然的政策」説と「民主化」の立場が両立しうるものであることを示しているように思われる。それとも相田氏は、この時期のヒルファディングの帝国主義認識そのものも変化していると理解しているのだろうか。

急進左派が即時の社会主義革命を唱えたことは、帝国主義＝「資本主義の必然的政策」説から不可避免的に導かれるのではなく、他の要因（急進左派の短絡的思考様式）が大きく作用しているように思われる。帝国主義認識の内容に即していえば、「資本主義の最高の発展段階」説に立っても、それだけで

は社会主義革命を導出することは必然でなく、レーニンの3規定のうちの帝国主義＝「死滅しつつある資本主義」ぐらいの極端な議論が必要であろう。そして、レーニンの帝国主義＝「死滅しつつある資本主義」説は、情勢の客観的認識というよりは主体的決意あるいは呼掛けと解すべきものである。

本書が提起しつつも解答を与えていない最も大きな問題は、マルクス主義的思考方法がいわゆる「特殊後進性」の認識にどの程度の有効性を持っていたのかという問題にあるように思われる。そしてこのことは、カウツキーはマルクス主義を発展させたのか、マルクス主義を乗り越えようとしたのかという問題でもある。

また、カウツキーの第3期の意義は「特殊後進性」認識にあるという相田氏の主張であるが、その「特殊後進性」認識の内容がいまひとつ不明確なのである。戦略論のレベルでの「特殊後進性」の問題はユンカートゥームの問題を意味しているが、これと経済の資本主義的發展の関係を如何に捉えているのか、経済構造そのもののなかにある特殊性を如何に捉えているのか、カウツキーの第2帝制論の綿密な紹介にもかかわらず、カウツキー自身の論理の構造が鮮明になってこないのである。相田氏自身はこの時期のドイツ社会の構造を大野英二氏らの研究に依拠してイメージを造り上げているように思われるが、カウツキーの認識は、大野氏らのドイツ社会論とどこで重なり合い、どこで相違するのか、理論の内容に即して明らかにすることが要請されているのである<sup>(12)</sup>。

相田氏は、このような「特殊後進性」の認識の問題を、ドイツ資本主義の「特殊型」論<sup>(13)</sup>と呼んで、ローザ・ルクセンブルクなどにそのような問題関心が欠如しているとしている。また、わが国の帝国主義論史研究の流れも『資本論』の世界の延長上で思考しているがゆえに、このような問題の所在を認識できなかったとしている。相田氏が明確にすべきなのは、そもそもマルクス主義的思考方法によってこのような「特殊後進性」の認識が可能なか否かということである。相田氏はそれについてネガティブに考えている

という印象を私は受けている<sup>(14)(15)</sup>。もしそうならば、カウツキーはマルクス主義的思考の限界を突破しようとしていることになるが、それならば、マルクス自身の方法的限界の剔抉が求められるし、カウツキーの第2帝制論とそれは如何なる関係にあるのかも明らかにされねばならない。やはり認識内容の理論的分析が課題となるであろう。

集権主義者の代表とみられるカウツキーのなかに、分権主義的要素を見いだしていることも重要であるが、この問題についても、それがマルクス主義の発展なのか、マルクス主義からの飛躍なのか明確に性格づけることが望まれる。

機能論に過度に傾斜したため、認識内容の分析が不十分になったと考えられる論点は他にもある。

第1章と第2章での「生産の社会化」論の役割については、分権主義派に対する「圧殺」の武器という機能がとりだされているが、例えば集権主義派のなかでも自由労働組合総務委員会やベルリン派右派の思想の全体像の解明がなされた上であれば、彼らにとっての「生産の社会化」論の意味がより明確になったであろう。レギーンやアウアーの思想構造全体の解明という課題が必須となる。

また、欧米のカウツキー研究が社会民主主義的な観点からのものも含めて、急進左派によるカウツキー批判を継承していることを批判してる点は正当であるが、それがカウツキー理論の機能についての議論のなかで触れられているので、マルクスとカウツキーの理論を水と油のように描き出してきた従来の説に対する打撃力を弱めている。機能論的分析は理論内容そのものの分析に取って替わることは出来ない。

上述の本書の欠陥は、社会認識レベルの議論に対する理論的吟味が不十分であることと結び付いている。それはまた、大野英二氏らによって第2帝制期のドイツの認識についてはすでに正解が与えられているという経済史研究へのもたれかかric態度とも通底するもののように思われる。それが相田

氏の積極的カウツキー論の説得性を弱めている。

しかし、通説的カウツキー像を打ち破り、カウツキーの全体像形成の土台を築いたことは、研究史上での本書の不滅の功績と言えよう。この重要なフィギュアに関する研究が今後続出することが望まれる。

註

- (1) Naito, T., KARL KAUTSKY BIBLIOGRAPHIE 1880-1932 (『大原社会問題研究所雑誌』第10巻第3号, 1933年)を参照。
- (2) 山本佐門『ドイツ社会民主党とカウツキー』(北海道大学図書刊行会, 1981年)。
- (3) 星野中「帝国主義論史における『社会化』論的系譜」(1)-(3) (『経済学雑誌』第72巻第2号, 第3号, 第73巻第1号, 1974年, 1975年)など。
- (4) 保住敏彦『ヒルファディングの経済理論』(梓出版社, 1985年)。
- (5) 松岡利道『ローザ・ルクセンブルク——方法・資本主義・戦争』(新評論, 1988年)。
- (6) 田中良明『バルヴスと先進国革命』(梓出版社, 1989年)。
- (7) 相田慎一『カウツキーと帝国主義認識——植民政策論を中心に——』(『経済学雑誌』第69巻第3号, 1973年)。
- (8) この四氏を一括できるかどうかは疑問がある。相田氏の批判が最も妥当するのは保住氏の著作であろうか。
- (9) そしてこの問題はヴェーラーをはじめとするドイツ社会史研究の流れが強調してきたものでもある。Wehler, H.-U., *Das Deutsche Kaiserreich 1871-1918*, Göttingen, 1973. 大野英二・肥前栄一訳『ドイツ帝国 1871-1918年』(未来社, 1983年)でその歴史認識の概略を知ることができる。
- (10) この傾向については、太田仁樹『レーニンの経済学』(御茶の水書房, 1989年) 2-3頁を参照。
- (11) 河野裕康『ヒルファディングの経済政策思想』(法政大学出版局, 1993年)参照。
- (12) レーニンは第1次大戦期の「軍・封帝国主義」論の時期までは、ロシアにおける政治権力の「特殊後進性」認識を維持していたと思われる。その場合、この権力の資本主義化推進政策をどう理解すべきかという点に難点を包含していた。「帝国主義論」の体系化が進むにつれて、政治権力の性格を「後進性」によって規定する傾向は薄まり、やがて消失する。革命後のネップ期に、レーニンはロシアの「後進性」を再び問題にすることになるが、それはロシア社会のより深部に潜むものであった(太田, 前掲書, 第6章参照)。レーニンと比較することで、カウツキーの「後進性」認識の構造的特徴が浮き彫りにされるのではないか。
- (13) このタームは、山田盛太郎『日本資本主義分析』(岩波書店, 1934年)に淵源するものであろう。学説史的には、相田氏はわが国の比較経済史研究を経由してこれを受け入れ

たことになる。カウツキーにおける「型」論と山田における「型」論の理論構造上の異同の明確化もまた求められるところである。

- (14) 内田芳明『ヴェーバーとマルクス——日本社会科学の思想構造——』（岩波書店、1972年）は「特殊後進性」の問題はマルクス的方法では扱えないものであり、そこに「ヴェーバー的問題」を考える意義があるとしている。相田氏の立場はこれに重なるものであろうか。しかし、山之内靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』（未来社、1969年）のように晩年のマルクスやエンゲルスのなかにドイツ資本主義の「類型の特殊性」の認識があったとする見解もある。とすれば、カウツキーの「特殊後進性」認識はマルクス主義の限界の突破ではなく、その創始者たちの継承なのだろうか。あるいは山之内のような見解はマルクスやエンゲルスの読み込みすぎなのか。これらの諸見解についての相田氏の見解もまた求められる。
- (15) 当時のドイツ社会の独自性を「後進性」として捉える、比較経済史研究やドイツ社会史研究の見方には私は与しないが、マルクス主義がこのような問題を扱うのに難点を持っているという点には同意できる。但し、マルクス主義的世界認識が難点をはらんでいるのは、「後進国」認識においてだけでなく、「先進国」の認識においてもそうだとすることを認めた上である。マルクス主義理論史研究の進展は、このことを次第に明らかにしていくであろう。